備讃瀬戸における高地性集落出土土器の検討

信里　芳紀

はじめに

備讃瀬戸における高地性集落の研究は、1955年から1957年の紫雲出山遺跡の発掘調査により本格的に開始されたといってよい(註1)。その後は、広島の心経山遺跡の報告(註2)や集成(註3)、貝殻山遺跡の発掘調査(註4)が行われ、分布や集落構成に関する研究が進んだ。

これらの研究に合わせて、高地性集落の機能として軍事面や物資交易への関与などの議論が行われたが、その一方で、紫雲出山遺跡や貝殻山遺跡を除く高地性集落の発掘調査が実施される機会は殆どなく、立地や表面採集資料からの推測を余儀なくされている。また、基礎資料である表面採集資料の詳細が公表されるも少なかったことから、山頂や山腹、山麓といった立地条件とも関係して、研究者によって各高地性集落の認定そのものが異なる状況も生じている。

そこで、本稿では、備讃瀬戸の高地性集落のうち、香川県域に関する既存の土器資料を集成し、今後の研究の便宜を図ることを目的とする。土器資料は、現存資料に関して実測資料化を行ったほか、所在不明資料は報告資料を収集して掲載した。

なお、紫雲出山遺跡については、既報告書等において資料化が行われていることから、本稿の対象から除外した。

なお、土器の帰属時期の表記は、弥生中期中葉（中期Ⅱ-１・２期）、中期後葉（中期Ⅲ-１～３期）、後期初頭（後期Ⅰ-１期）、後期前葉（後期Ⅰ-2期）とし、詳細は拙稿を参照していただきたい(註5)。

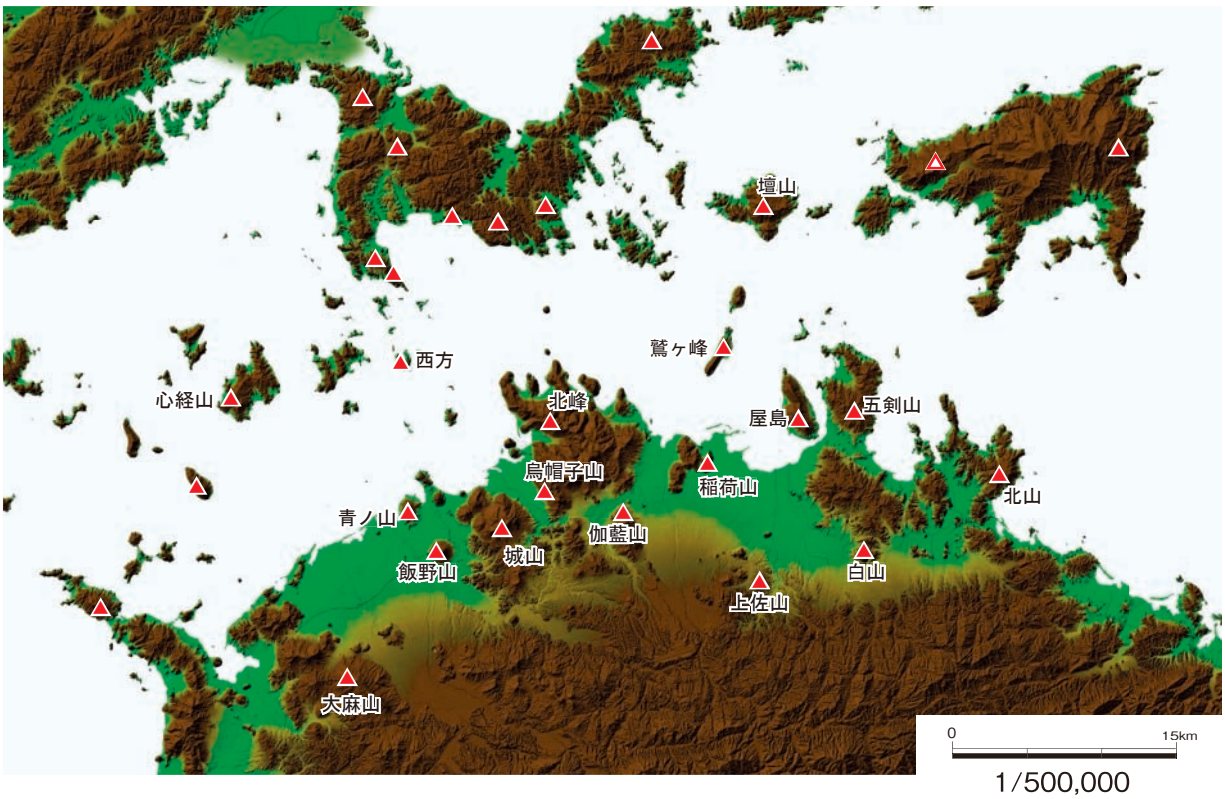

図１　高地性集落分布図

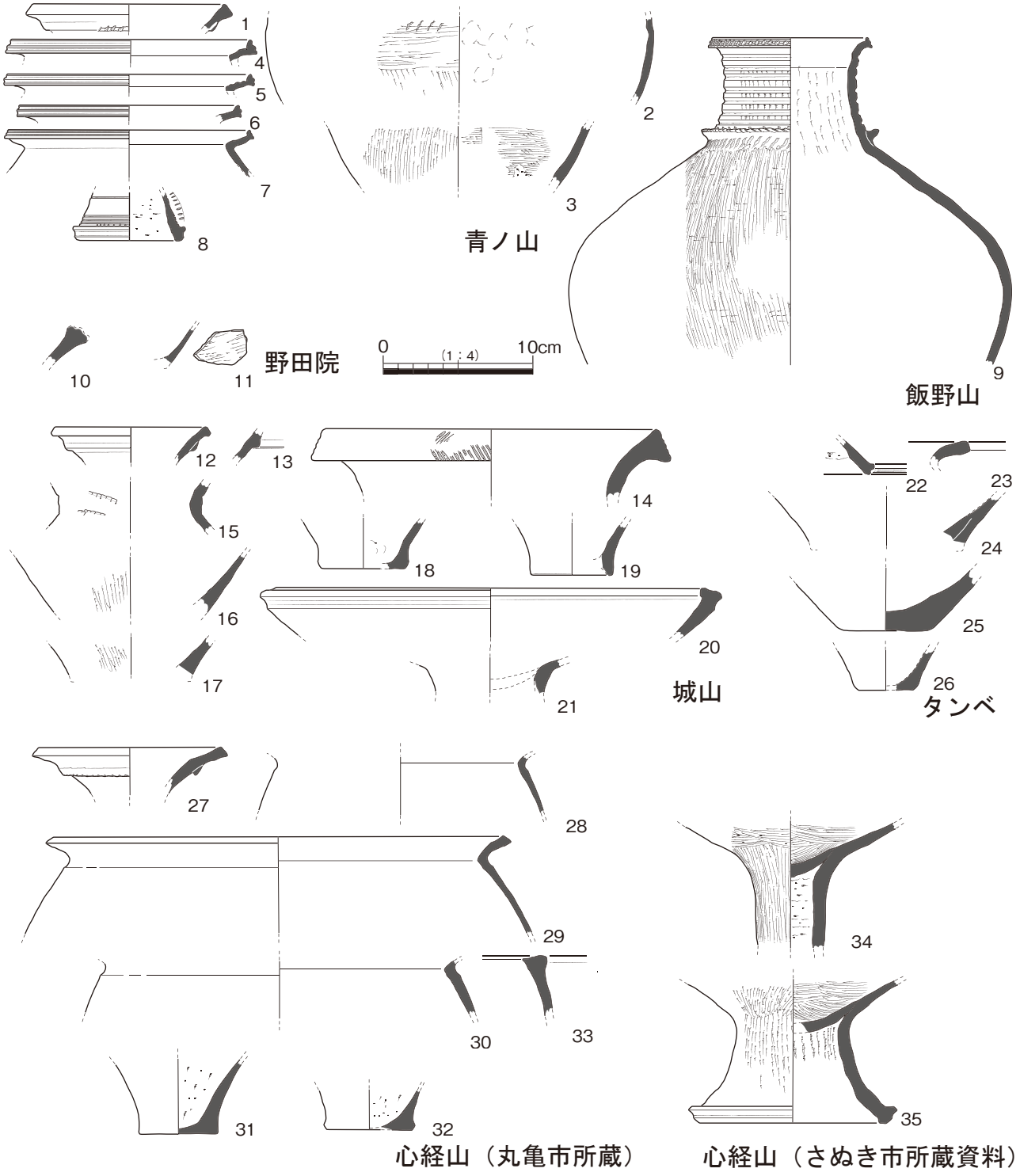

図２　高地性集落出土資料１

１　各高地性集落の土器

（１）青ノ山（図２-１～８）

丸亀平野北東部の青ノ山（標高 224 m）山頂に所在する古墳時代後期の青ノ山８号墳の調査に伴って弥生土器が出土している(註6)。

１は細頸壺の口縁部片であり、外面の口縁部下に刻目を１条の貼付突帯がみられる。２、３は壺胴部片であり、２の外面の胴部最大径付近には貝殻腹縁による列点文がみられる。

４～７は甕の口縁部片であり、強い横ナデと上方に拡張された口縁端部外面に凹線文が施される。８は高杯の脚部片で、脚部外面は列点文と横

位の沈線で加飾される。

青ノ山山頂出土資料の帰属時期は、１のみ中期Ⅱ-2期に遡る可能性があるが、他の資料は中期Ⅲ-1期にまとまる。

（２）飯野山（図２-９）

丸亀平野北東部に所在する飯野山（標高422ｍ）山頂から弥生土器が採取されている(註7)。９は大型の長頸壺で、胴部最大径より上位が残存する。上下に拡張される口縁端部外面に竹管文、頸部外面に７条の凹線文を施し、頸胴部界に刻目をもつ貼付突帯を１条付与する。胴部外面の縦ミガキの下位には僅かながら平行タタキが確認できる。

長頸壺は後期初頭以後に確認される器種であり、頸部外面の凹線文に伴う横ナデの簡略化がみられるが、口縁部形態から判断して、中期Ⅲ-3期に比定される。

（３）大麻山＜野田院＞（図２-10・11）

丸亀平野南西部に所在する大麻山（616ｍ）の西側斜面の標高463m付近に平坦地があり、古墳時代前期の積石墳や古代から中世の山林寺院が立地し、「野田院」と呼ばれている(註8)。厳密には山頂立地ではないものの、これに準じた高所立地と捉えて差し支えない。野田院古墳の整備事業に伴う発掘調査の出土品の中に、５点の弥生土器片を確認し、その内、２点を図化した(註9)。

10は短頸広口壺の口縁部であり、口縁端部に僅かに凹線文が確認できる。11は壺底部片であり、外面に縦ミガキ、内面は摩滅が進む。薄手の器壁厚からみて、中型壺の底部片と考えられる。

大麻山出土土器の帰属時期は、10の短頸広口壺の形態や11の広口壺の器壁厚から判断して、中期Ⅲ-１～Ⅲ-２期に比定できる。

（４）城山（図２-12～21）

城山は、五色台とともに香川県中部の丸亀平野と東部の高松平野を画する山塊の一つである。山上部が讃岐岩質安山岩に覆われる開析溶岩台地（メサ）であり、台形の山容をもつ。山上部は比較的平坦となり古代山城の城山城の城壁が巡るが、南寄りに山頂（標高462ｍ）が所在しており、弥生土器・石器の考古資料が採取されている(註10)。

12・13は細頸壺の口縁部片で、口縁部からやや下がった位置に貼付突帯を施す。13は小片のため、突帯上の刻目の有無が判断できない。14は広口壺の口縁部であり、肉厚の口縁端部外面に、ハケ原体押捺による綾杉文をもつ。15は壺頸部片であり、傾いたハケ原体による列点文を施す。16･17は壺底部片。18･19は甕底部片であり、内面が突状となる細身の形態をもち、内面の調整にケズリは確認できない。20は台付鉢の口縁部であり、口縁端部下には１条の凹線文が確認できる。21は円盤充填が剥離した台付鉢の鉢から脚部の境界付近の破片である。

城山山頂出土土器は、形態や調整からみて凹線文発達以前の中期Ⅱ-１～２期を中心とする。

（５）北峰＜タンベ＞（図２-22～26）

五色台は、白峰山や大平山など複数の支峰をもつ開析溶岩台地（メサ）の総称であり、この中でも北峰（標高389ｍ）は北部の支峰の一つである。北峰付近には、文政元（1818）年の築造とされる溜池のタンベ池があり、弥生土器・石器が採集されている(註11)。

22は高杯脚部片。１条の凹線文がみられる脚端部拡張は顕著ではなく、内面ケズリが確認できる。23は甕口縁部片であり、口縁端部に凹線文や跳ね上げはみられない。24･25は壺底部片。25は丸味を帯びた厚手の底部となる。26は甕底部片で、内面は摩滅し、調整を確認することができない。

タンベ出土土器は、甕口縁（23）や同底部（26）、壺底部（25）の形態、高杯脚部片（22）の形態や施文状況からみて、中期Ⅱ-1～Ⅲ-1期に比定することができる。

図３　高地性集落出土資料２

（６）心経山（図２-27 ～ 35）

心経山は、備讃瀬戸西部の塩飽諸島の一つである広島の西部の山塊であり、山頂（標高約 190 m）から東へ続く稜線上の数地点から遺物が確認されている（註 12）。また、心経山については、既往の報告（註 13）が存在するが、現状で資料は所在不明となっているため、ここでは実物確認可能な資料（註 14）について先に触れておく。

27 は細頸壺の口縁部。外側に大きく開く口縁部下に１条の貼付突帯をもつ。28 ～ 30 は甕であり、29 は跳ね上げとなる口縁や頸部に強いヨコナデ手法をみる。31･32 は細身の甕底部片、33 は鉢口縁である。34 は高杯の杯部から脚部片であり、脚部内面にヨコケズリと杯部には円盤充填が確認できる。35 は台付鉢であり、脚端部には一条の凹線文がみられる。

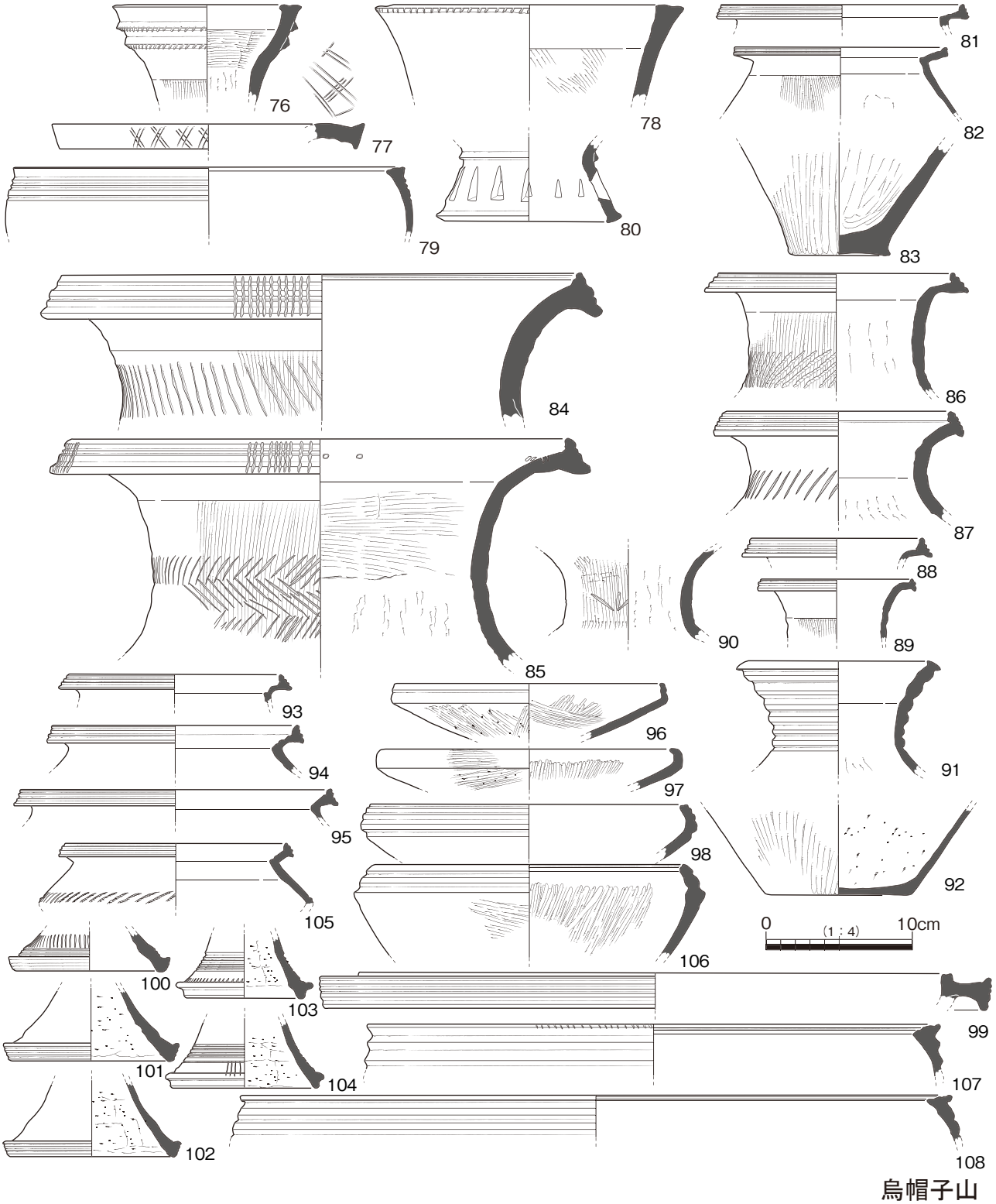

図４　高地性集落出土資料３

心経山出土資料のうち、これの資料は中期Ⅱ-1期から中期Ⅲ-1期に属するが、後述する既往の報告資料には中期Ⅲ-3期までのものが含まれる。

（７）西方 (図３-36 ～ 75)

西方は、備讃瀬戸西部の塩飽諸島の一つである与島に所在する。与島の地形は、中央の低地を挟み南北方向の東西二つの丘陵から構成されてお

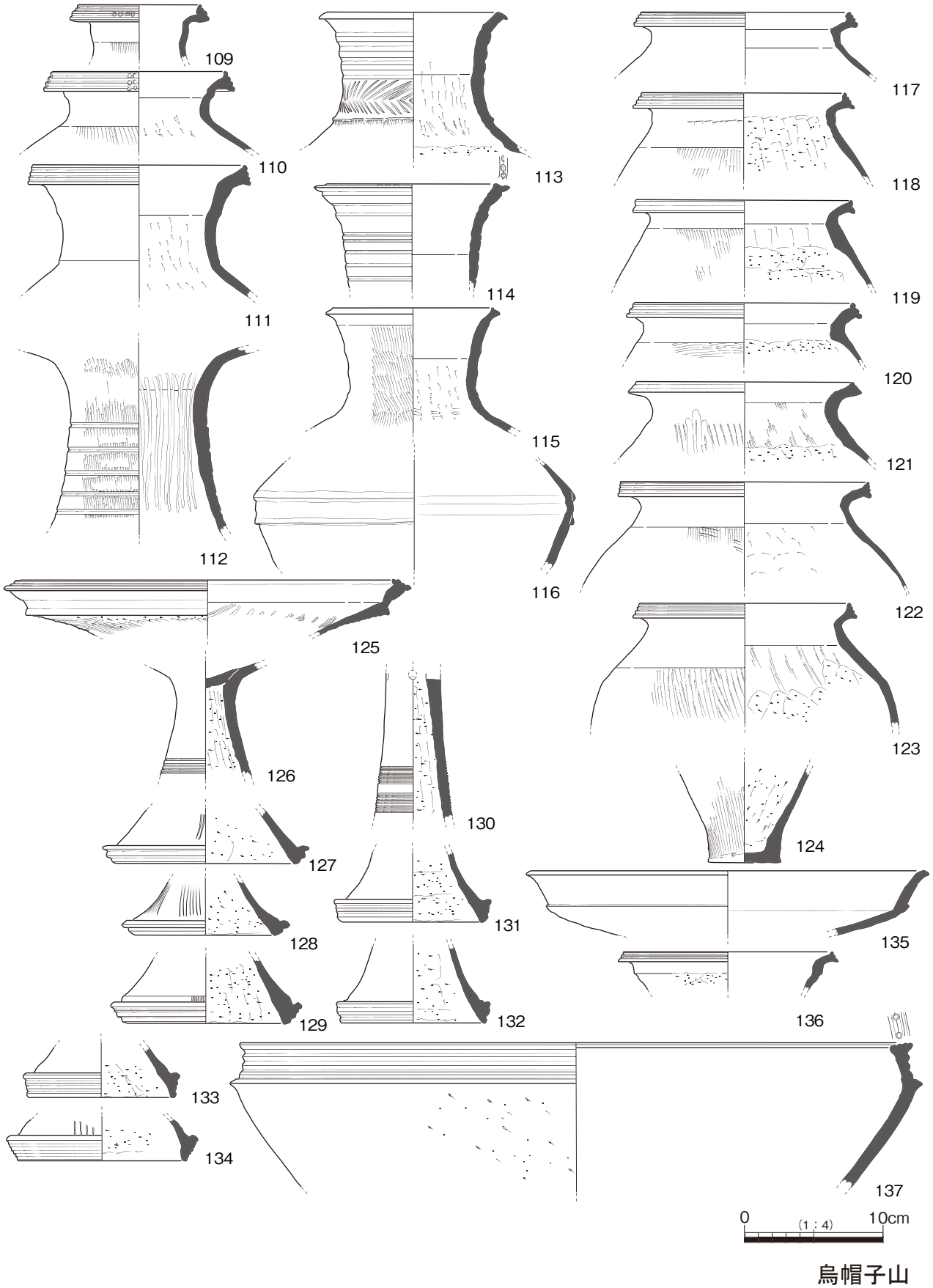

図５　高地性集落出土資料４

り、東側丘陵は「東方」、西側丘陵が「西方」と呼ばれ、西方は瀬戸大橋架橋建設に伴い発掘調査が実施された。中でもＡ・Ｂ地区とされた丘陵北部稜線上（標高 45 ～ 50m）の調査区から弥生土器が出土している。既往の報告資料[註15]に加えて、時期比定可能な資料を図化した。

36 ～ 57 は壺である。46 は口縁部外面と同内面に円形浮文を多量に付与する。口縁部外面における多量の円形浮文は、四国側讃岐ではあまりみられない属性である。55 は内傾する頸部から緩やかに開くもので、児島の城遺跡[註16]に数点の類例がある。南九州系の可能性も考えたが、備讃瀬戸島嶼部に分布する型式として捉えておく。58 ～ 65 は甕。凹線文が発達する 58 ～ 62 と、跳ね上げ口縁をもつ 63･65 がある。66 は甕口縁の可能性があるが、残存する頸部形態から台付鉢と考えた。68 ～ 73 は高杯。72･73 は脚部形態や三角形透孔からみて吉備系の高杯である。他の資料と異なる白色系胎土をもつことから、児島若しくは吉備南部からの搬入品と考えられる。74 は壺若しくは台付鉢とみられる資料で、外面に鋸歯文が施される。胎土は他の資料と違和感がみられないが、多系統の資料とみられる。75 は大型の台付鉢の脚部片である。

西方出土資料の帰属時期は、中期Ⅱ -2 ～中期Ⅲ -3 までの時間幅をもつものと考えられる。

（８）烏帽子山（図４-76 ～図６-143）

烏帽子山は、先に触れた五色台の南西部の支峰（標高 260 m）であり、山上が讃岐岩質安山岩に覆われるビュートと呼ばれる円錐形の山容からその名で呼ばれている。遺物は山頂から北斜面に多く分布するとされ[註17]、昭和 24（1949）年頃からの採石に伴い、遺物採取や発掘調査[註18]が実施されたが、現在、山頂は消滅している。本稿の報告資料は昭和 44（1969）年に山頂で採取された資料[註19]の中から、高地性集落の継続時期を示す資料を中心に抽出した。また、資料数が多量であるため、時期別に提示し、説明を加えていきたい。

76 ～ 83 は中期Ⅱ -2 ～中期Ⅲ -1 期の資料である。細頸壺（76）は、口縁端部上面に凹線文を施す。広口壺（77）は、口縁部内外面に斜格子文を施文するが、中期Ⅱ -1 期に比べて、線数が減少している。78 はバケツ形の鉢、79 は内傾する口縁部をもつ鉢で口縁部下に３条の凹線文をもつ。80 はジョッキ形の台付鉢脚部。甕口縁（81 ～ 82）は口縁部に小条の凹線文をもつが、端部の拡張は顕著ではなく、凹線文の出現期の特徴をもつ。甕底部（83）は内面ケズリがみられない厚みのある中期中葉の形態をもつ。

84 ～ 108 は中期Ⅲ -2 ～中期Ⅲ -3 期に属する資料である。84 ～ 92 は壺である。84･85 は口縁部が大きく開き口縁端部に凹線文、頸部に列点文をもつもので、中期末葉の特徴を示す。広口壺（90）の頸部外面には記号文がみられる。甕口縁（93 ～ 95）は口縁部の拡張が進むが、95 は中期末葉の形態的特徴をもつ。高杯（96 ～ 104）のうち、99 は垂下口縁をもつもので、口縁部外面には４条の凹線文を施す。105 ～ 108 は鉢であり、105 は脚台付と考えられる。

109 ～ 137 は、後期Ⅰ -1 ～後期Ⅰ -2 に比定される資料である。109 ～ 116 は壺であり、116 は胴部最大径に２条の貼付突帯をもつもので、吉備系とみられる。117 ～ 124 は甕であり、口縁部の屈曲や内面ケズリが上方に及ぶなど、後期初頭から後期前葉の特徴をもつ。125 ～ 135 は高杯であり、形態や施文方法からみて、吉備系（125 ～ 128、130）、備中・備後系（133･134）が含まれる。吉備系（125.127）は同一個体の可能性がある。135 は口縁端部の拡張を失っており、これらの中でも最も後出する資料である。鉢（136）は形態や外面ケズリからみて、備中・備後系と考えられる。137 の大型鉢は、口縁部形態からみて讃岐ではあまりみないものである。

138 ～ 143 は後期後葉から終末期にかけての資料である。広口壺（138.139）は口縁端部外面に鋸